

「今日の説教、聴き手のために」 2008/4/13 明治学院教会(110)
(このプリントは毎週作っているものです) 岩井健作
「イエスのいつくしみ」
新約 マルコ福音書10章21節～31節

1. 「いつくしみ深き友なるイエスは」 (讃美歌312) は、日本ではキリスト教徒以外の人にも親しまれている。結婚式にも葬儀にも歌わる。それは順境のときも逆境の時も、健やかな時も、病む時も「神関係」を基本としているからであろう。「主が与え、主が取られたのだ、主の御名はほむべきかな」(ヨブ1:20)。「神関係」は、聖書では私たちが「神に向かう関係」ではなくて、「神が私たちに向かう関係」を表す。「今は神を知っている、いや、神から知られている」(ガラ4:8)がうまく表現している。「神関係」の対義語(アントニム)は「神礼拝」であろう。
2. 「いつくしみ深き」という言葉は画家ホフマンの「富める青年を見つめるイエス」を思い起こさせる。マルコ10章21節を題材にしている。「イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた。「あなたには足りないことが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」」。大変厳しい言葉だ。この世界に格差があり、貧しい人々が存在する限り、多くの人はこの言葉の前には途方にくれる。それにも関わらず「彼」を見つめる目が「いつくしみ」に満ちているとは、どういうことであろうか。
3. マルコ10章は個性的な物語の収録。「離縁について教える」(1-12)、「子供を祝福する」(13-16)、「金持ちの男」(17-31)、「イエス、三度自分の死と復活を予告する」(32-34)、「ヤコブとヨハネの願い」(35-45)、「盲人バルテマイをいやす」(46-52) [新共同訳聖書見出]。イエスの文脈では、無理解な弟子批判、パリサイ派批判である。マルコ福音書の教会の事情からいえば、中途半端な信仰に生きる教会の構成員に対する戒めである。叱責と批判が強い章であるだけに、「イエスのいつくしみ」の表現が貴い。
4. 「いつくしみ」はマタイ(19:16-30)とルカ(18:18-30)では削除されている。「いつくしみ」は「アカペー」で、「愛」「神の愛」を意味する。「神関係」の基本用語である。マタイ、ルカは情景と理解してイエスの叱責にふさわしくないと省いた。マルコはイエス理解の根本から「いつくしみ」を捉えている。「気を落とし、悲しみながら立ち去る」という人間の弱さの全てを包む「いつくしみ」が福音書の福音理解の根本にあることを示唆する。
5. 「現代日本キリスト教文学全集」第11巻「日常と家庭」。三浦朱門、島尾敏雄、曾野綾子、三浦綾子、遠藤周作、有吉佐和子らの作品集。人間実存の罪深さが扱われているがその底に「いのち」のモティーフを描く作品群。有吉佐和子(カトリック)「芽鱗」。木の芽を包んでいる鱗のような覆いで寒さから芽を守る「芽鱗」のように、姑のいのちへの思いが、階段から転げて「でもよかったよ、民子さんでなくて」と漏す。その言葉が、生活に喘ぎ苦しむ若い夫婦の中絶を思いとどまらせた、いのちをいつくしむ物語。